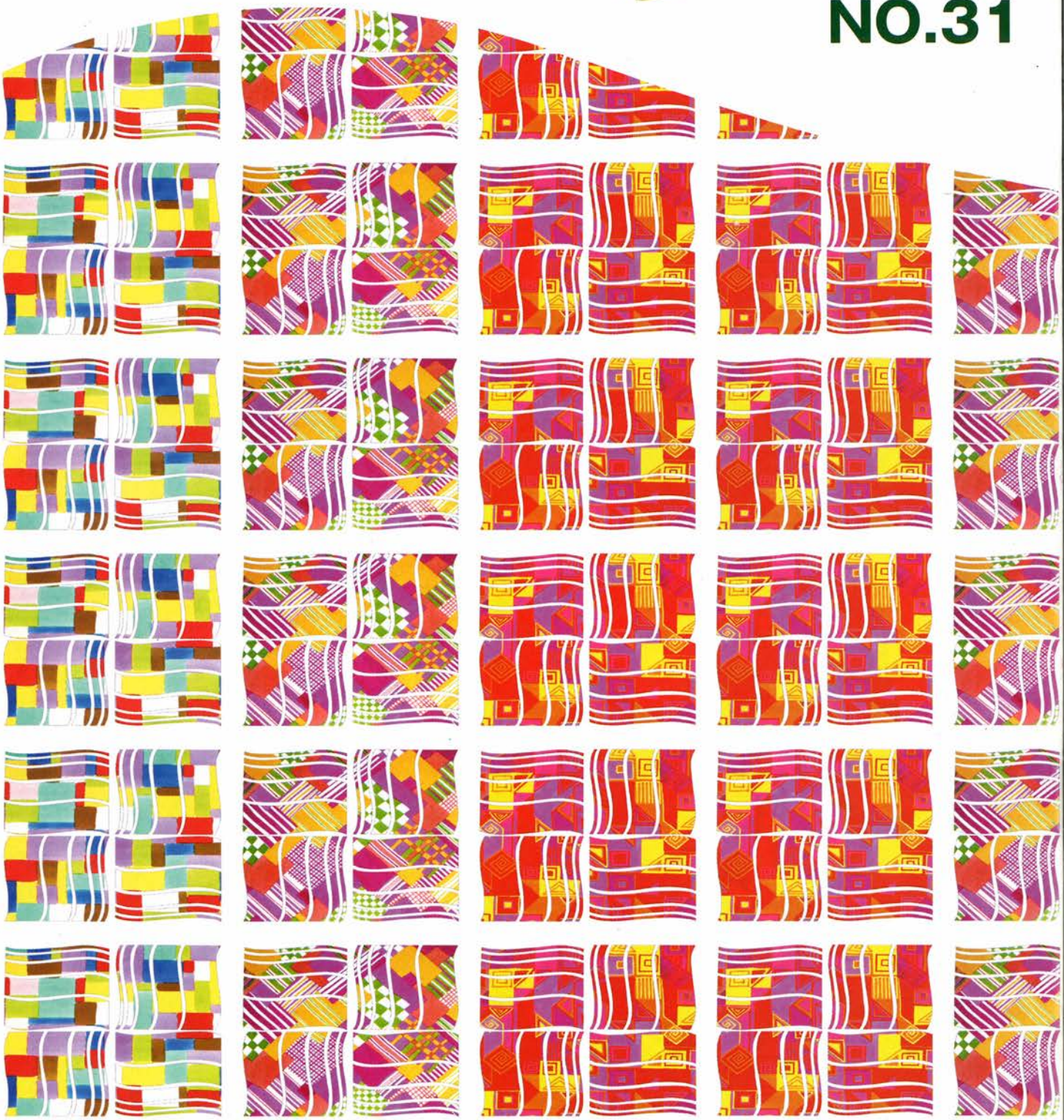
ともに担い、ともに築く、女と男の情報誌

# わっぱわなぐ

特集　見つめ直そうパートナーシップ

NO.31



ねっとわぁく　No.31　　もくじ


特集　見つめ直そうパートナーシップ ……2

提言　女と男の良い関係は、はたして可能だろうか
大阪女子大学教授　田川　健三さん 4

特別講座　女らしさの病い
家族機能研究所　主任研究員　波田あい子さん 7

ルポ
人と自然がともに生きるまち
～男女共同参画社会づくりモデルの清水町を訪ねて～ ……8

あの町この町　パートナーシップ
学校と地域のパートナーシップ
～地域に開かれた学校、学校に開かれた地域を目指して～……10

図表　今、パートナーシップは……12

ガイド　編集員のおすすめ本／図書室より ……14

コラム　知っておきたいキーワード　パートナーシップ　NGO　NPO他……15


# 特集 見つめ直そうパートナーシップ

ひとりひとりを大切にしながら
共に生かされる関係
パートナーシップ
女と男

親と子
老人と若者
家庭と地域
民間と行政
NGOと政府
国と国

いろいろな
パートナーシップがあるけれど
あなたのまわりの
パートナーシップを
見つめ直してみませんか

大阪女子大学女性学研究センター前に立つ筆者

# 女と男の良い関係ははたして可能だろうか

良いパートナーシップは、真に対等な関係が基盤になければ、実現しない。女と男の関係においてもそれは同じである。それも、単に個人と個人の間だけでなく、まず社会的な関係としてすべての女と男の間に、社会のすべての場面において、十分に対等の関係が樹立されなければ、個人としての女と男の間にも、本当に良い関係が実現するわけもない。

## まず社会的平等を

この社会で女が男よりも下の存在として扱われていれば、家庭の中にもいやでもそれは影響を与えてくる。たとえば、賃金のことだけ考えても、今の社会では、同じように働いても、女に支払われる賃金は男に比べて嘘みたいに少ない。大多数の女は、たとえ能力が男と同じであっても、あるいはしばしば女の方が能力がある場合でさえも、下働きの発展性のない仕事しか与えられず、男の「上役」に命じられるままに機械的に働かされる。

しかし残念ながら、大多数の男どもは、この社会で働く時に、女を対等な相手とみなさない。男どうしの間ではけっこう礼儀正しい男が、相手が女となると、いかにいばりくさ

大阪女子大学教授
田川 建三さん

ったものの言い方をすることか。あるいは逆に、いかにも親切ぶって、まるで子どもでも相手にするような態度に出る。この種の親切さは蔑視の裏返しであって、相手を対等な人格とみなしていない証拠である。しかし、こういった個々の男の態度は、決してその男の意識の低さだけが原因であるわけではない。もちろん、その種の男が人間的に怠慢であるのは確かであるとしても、個々人の意識の持ち方だけでは社会関係の実態は変らない。むしろ、社会的に上下の関係に置かれているからこそ、その事実がいやらしい蔑視の姿勢を生み出すのである。そしてその姿勢がセクハラ、性的暴力等にも結びつく。

大多数の男は、私は女性を蔑視していません、と思っている。しかし、実態はどうだろうか。彼らが心の中でそう思う時、実は、「かわいらしく、美しく、めづべき対象」として「大事」にしているというだけであって、本気になって対等の人格関係を樹立しようとしているわけではない。その男たちに言わねばならぬ。蔑視していないのならば、少なくとも、女性の賃金と地位があなたと対等になるように、本気になって努力しろよ、と。

## 社会と家庭の不可分

さて、広い社会関係の中で、たとえば職場で、女性蔑視の姿勢を保っている男が、家に帰った時だけ女を人格的に対等に尊敬する、ということがありうるだろうか。そんなことはそもそも可能性としてありえない。同様に、家の中で女を自分の家政婦兼娼婦としてのみ位置づけ、そのように位置づけることが「夫」としての地位の確立だと思っているような男が、職場に出て行って、職場の女性に対して対等な人格としての尊敬をいだくことができるわけがない。

良きパートナーシップはある程度以上の分業からは生れない。徹底した分業は、仕事の評価に応じて、その仕事に従事する人を差別する。知的・技術的エリートと単純労働に従事する者の間で、これだけ賃金の差が大きく存在する以上、互いの間にいかなる不信感もない真のパートナーシップがそこに生れる、というのは不可能である。ましてや、小さな家庭の中で、女の仕事と男の仕事が分れている場合（あるいは、女は家庭的仕事をする存在、男は外で仕事を外でする存在、という分業）、その前提の上に立って十全たる人格的尊厳、尊敬を相互にいだく、というのは不可能なことである。

食事の準備一つにせよ、男たちは家庭で、女に作らせた料理をふんぞりかえって食べるよりも、女と同等の時間と労力を用いて炊事に従事する、そういう対等な男女がいっしょに台所で働くことの方が、人間としてはるかに幸せである、ということを、みずからの経験によって知るようにならねばならぬ。かわいそうに、その経験を持てないでいる男がどれだけ大勢いることか。女性蔑視の社会は、

## プロフィール

田川建三（たがわけんぞう）

1935年東京にて生。東京大学文学部卒、ストラスブール大学宗教学博士。ゲッチンゲン大学（ドイツ）、ザイール国立大学、ストラスブール大学（フランス）などの常勤講師、教授等を経て、1978年より大阪女子大学に就任。82年より同大学にて「女性論」（現「女性学」）講座開講。その後同大学に作られた女性学研究資料室（現女性学研究センター）の室長、センター前主任を歴任。

男にとっても不幸な社会なのだ。つまり、男たちから家事をなすべき時間を奪っている社会機構が存在する。男たちは、そのように生きさせられていることについて、互いを哀れむ必要があり、そして、互いを哀れまなくてもすむような社会を来たらせる努力をする必要があるだろう。

## 個人的努力を超えて

さて、私が言いたいのは、家庭内で、単に家事を対等になすだけでなく、真に人間として対等、同等の尊厳を認めあう関係を女と男の間で築き上げる努力をなしたとして、しかし、社会全体で真に男女の平等が実現しない限りは、その努力は、究極的には、空しく終る、ということである。確かに、個々の男女が互いに大きな人格的努力をすれば、そこに比較的良いパートナーシップが実現することもあろう。しかし、それでもやはり、肝に銘じて知っておくべきことは、この社会に存在する不平等がなくならない限りは、個人的努力だけで作り上げた私的空間での良きパートナーシップにもどこかすき間風が吹き込むのはやむをえないのである。そのすき間風は、個人的にはどんなに良き、すぐれた努力をしている男女の間でさえも、時にはその関係を破壊するくらいに猛威をふるいはじめる。

考えてみれば当然のことでもあろう。賃金において圧倒的な差をつけられているとしたら、日々の生活において、どうしても依存関係を生み、その依存関係は心理的なひずみを生む。ましてや、賃金に差があるどころか、女の側が、働けど働けど、そもそも自立して食っていくことができない程度の賃金しか得られないとすれば、その上に立つ男女の生活上のパートナーシップといっても、その基本的な差別から生じる女の側の不満（不満どころか正当な憤り）を除くことはできない。そして、その不満が存在する限り、どこかですき間風が吹いている。

## 遠くて近い未来

だから我々は、すべての女性が、社会的立場、賃金、その他すべての社会関係において、男性と真に平等・対等でありうる社会を作らなければならない。その時にはじめて、一人一人の女と男の間でも、胸をときめかすようなパートナーシップが実現するだろう。それは、今のところ残念ながら、気の遠くなるほどに遠い未来であろう。女と男が共に生きようとする時、この未来の遠さの前に、つい無力な空しさを覚える。だが、どんなに遠い未来であっても、その未来を見定めつつ、その社会を来たらせる努力を今現在においてすることのできる女たちと男たちの間には、今すでに、すばらしいパートナーシップが誕生するだろう。まだ克服できない社会関係の問題の故にぎくしゃくしつつも、それを克服しようとする意志において連帯できるからだ。